回会報

新日本美術協会

事務局
千葉県柏市大津ヶ丘
3-17-17-401
森屋冶三方
TEL04-7191-6760

編集委員
本部　小高峯夫
富岡ネム
大石　亨
京都　四方公子
広島　藤原清二

会長年頭挨拶

中尾不二夫

新年にあたり一言ご挨拶申し上げます。昨年は未曾有の大災害で日本中がたいへんなことでしたが、私自身においても、九十一歳になってから心臓の大手術を余儀なくされ、死ぬか生きるかのきびしい治療をしてきました。今、懸命に体力回復のリハビリ中ですが、必ずや復帰し皆さんの前に姿を見せたいと心を決めております。

昨年の記念すべき第三十五回展に出席できなかったこと誠に残念でなりませんでしたが、事務局長初め、委員スタッフの協力のもと盛大に開催終了出来たことに感謝申し上げます。加えて三十五回展を記念して、本会在籍二十五年以上の長きにわたり会の発展に寄与された十二名の方に敬意を表します。

三十五回記念展は全国各地よりレベルの高い作品が数多く寄せられ、また会員の作品も記念展にふさわしい意気込みのうかがわれる力作がそろい、充実した会場であったと承っております。受賞された方々本当におめでとうございました。受賞されなかった方も僅差で賞に漏れたというにすぎず今後一段と努力を重ね飛躍されんことを期待します。

最後にわたしが常々申し上げていることですが、「人は何のために絵を描くのか「美とは：絵画とは：」の問題です。人により千差万別、一概に結論を出すわけにはいきませんが、この際今一度初心に帰って考えてみる必要があると思います。とことん自分自身の力を信じ独自の世界を表現するよう精進を重ねて行けば必ずや、見る人を感動させ世に残るような素晴らしい作品が生まれるものと信じてやみません。

この上は本会が公平で民主的な運営を基盤として発展し、中堅公募団体として、名実ともに評価されるよう切に望みます。

三十五回記念展を振り返って

実行委員長　富岡ネム

明日につなぐ
新都美術館を見据えて

明けまして　おめでとうございます。小春日和の穏やかな「上野の森美術館」で、第三十五回記念展が開催されました。芸術発祥の地で盛会をもって終了できましたことを大変嬉しく、感謝の気持ちで一杯です。

会長が長期療養のため不在の中で事務局長、会計担当委員、各関係委員の凄まじいばかりの決断と実行力のおかげだと思います。ありがとうございました。

一口に三十五回展と言いましても、会を存続する事、させる事は一筋縄ではいきません。無事に記念展が終了したからと諸手を挙げて喜んでばかりはいられません。一つの終わりは次への始まりです。中堅の得難い評価を背景に一層の躍進を望みます。

新都美術館使用の許可がおりました。長期的展望に立って新日美の発展を明日につなげる、その第一歩が今年十月開催される三十六回展です。

新都美術館使用に関してはこれまた難問の山積でした。新都美術館サイドからの要望に応えるには、厳しい査定や審査があります。使用したい団体は多いのです。また都美術館改修工事中の二年間、空白の二年間をいかに活動したかも大いに問われるところでした。そんな時「上野の森美術館」での本展開催が勇断、実行されたことは、これもまた新日美の実績と自信につながるものと思います。

翻って別方向から考えてみれば、新日美に運営専門家がいるわけではありません。会員全て絵を描き、物を創る。何の為に描くのか、創るのかそれは各自千差万別でしょう。けれどこの数十年の流れは各界地球規模で変動し、グローバル化し続けています。かつてあった懐かしい野山も、町も国さえもそのあり様を変えなければ存続できない時代に突入しています。

一般観客にも多様な価値観が広がり、解釈も一つではなくなった現在、時代の要求に応えうる新日美を作らなければならないと思います。芸術に国境がないのは幸いです。明日へつなぐ、今一度会員一人一人の立ち居地を考える、いい機会ではないでしょうか。

三十五回展総評要旨

外部審査員　芳賀文治先生

二日間にわたって作品を前にして話してきました。その中で全体として感じた点を申し上げると先ず、絵画では各々の作家に進歩しているあとがうかがえる事です。次に表現手法が多様化して、半具象の作品が増しているように思われた。水墨画、水彩画にいい作品があったと思う。

毎回申し上げていることですが、私の絵をみる観点は、色、形で自分の想いがどれだけ画面に表現されているかである。工芸については、表現技術が重要な評価要素になると思います。

モディリアーニの描く女性の首はなぜ長い

大石　亨

映画『モンパルナスの灯』(一九五八)―みすぼらしい服装をした画家・モディリアーニが覚束ない足取りでカフェのテーブルの間を廻りながら、手にしたデッサンを「一枚五フランゝ々」と売り歩く。

伝説によれば、モディリアーニはパリでの放浪生活の最中、酒と麻薬で異常なまでに鋭敏にとぎすまされた感覚が突如、天啓のようにひらめき、あの独特の女性像―泣きたいような、訴えるような目をした首の長い女性像が生まれたとか・・・。

モディリアーニは一八八四年イタリアに生まれた。フィレンツェとヴェネツィアの美術学校に学び、一九〇六年、二十二歳の時、パリに出た。

パリでの彼はモンマルトルのホテルとアトリエを転々。当時の多くの無名の画家たちと同じように貧乏と孤独に苦しみながら、酒と麻薬に癒しを求め放浪生活を送った。そのかたわら彼は絵画の中に独自の人物像を追求して止まなかった。

そんなある時、彼は突然、油絵をやめ石材彫刻を始めた。数年間彫刻に没頭したものの、更に進めるには石材と広いアトリエを必要とした。その上、石塵が身体に良くないと知り、結局、彫刻をやめ絵に戻った。

しかし彫刻は彼の絵を描く上には決して無駄ではなかった。余計なところを切り捨て、本質的なものだけに還元された彼特有の人物像のタイプが確立されたのは、ほぼこの時代である。パリに出て、放浪生活、石材彫刻など暗中模索の時代を経て、彼はようやくにして自分自身の永遠の女性像を見出したのである。

晩年(一九二〇年死亡)、モディリアーニの最後の伴侶となったジャンヌ・エビュテルスと出会ってからは、彼の描く女性の顔・首・腕はますます細く、長く、かつ華麗となって輝くのである。